

【小学校の部】 優秀賞

ふるさとからの贈り物

学校法人別府大学明星小学校 6年
幸野 真衣



「また今度、おみや持ってくるね。」

今日も十八時三十分、いつもの海岸でみんなの笑顔あふれる私のふるさと、別府。

新型コロナウイルスの影響で例年より短い夏休みとなった。私の夏休みを心待ちにしていたのは、一才の愛犬「ねねちゃん」である。猛暑の中、犬にとって夏場のお散歩時間、アスファルトはとても熱くなっていて肉球が火傷してしまうので、夕方すずしくなって一緒にお散歩する。ギターを片手に歌う人、海外からの留学生、リハビリ中のご夫婦、スケボーをしているお兄さん、またまた、巡回中の警察官まで愛犬に声をかけてくれるのだ。

にっこり笑ってこちらへ歩いて来たのは、先日声をかけてくれたおじいさんだった。「おみや」とは何だろうと疑問に思い悩んでいた、私。「おみや」とは愛犬ねねちゃんへの「お土産」のことだった。「私と愛犬のことを覚えてくださっていたんだな。」と心が嬉しくなり忘れられない時間となった。

愛犬のことはもちろん、学校で起きたこと、友人のこと、進路のこと、人生の先ばい達は毎日たくさんのことを私に教えてくれる大切な存在。毎日会話をして気付いたのは、東京や長崎、東北から移り住んで別府に来た人が多かった。共通していたことは大分県の方言を上手く使いこなす、郷土大分県を愛する仲間だということだった。

私がスクールバスを降り一人で歩いて行くと、

「まいちゃん」と遠くから私を呼んでいる声がある。それは愛犬の友達、ハリーくんのおばあさんだった。おばあさんは共同温泉で入浴を終え、洗面器を片手に気持ちよさそうな笑顔だった。学校の帰り道は不審者に気を付けなければならなくて、私の体の後ろにも目が付いているかの様にドキドキとした緊張感が漂っている。私を優しさで包んでくれるのは、近隣の住民だった。

一匹の愛犬を飼うことで兄から猛反対された記憶は今でも忘れない。いや、この先も一生忘れないだろう。私は兄から猛反対されたことがつらくて一晩中涙を流した。飼い主さんになることは、正直大変なことばかりだ。市役所に登録、獣医さんやトリマーさんへ預けるときの気持ち、お散歩の時はマナーを守り他の人や犬に迷惑をかけないようにするなど、しつこくを毎日やってもくり返し、くり返し向き合わなければならない。毎朝、毎晩一生懸命、愛犬への思いやりの気持ちを持ち一心同体で過ごしてきた。

愛犬を通じて学校の友達や先生と会話がなくなった。みんなが「ねねちゃん」と名前を覚えてくれる。今では愛犬に対する兄の姿は百八十度、人間が変わった様に見える。

私を支えてくれる街の人々は本当に大好きだ。相手のことを思うことがこんなにも心に響くものなのか。教えてもらうことが多い日々。たくさんの「心」という贈りものを頂いた私は、次世代に受けついでいけるように心のバトンをつなげていきたい。